

みられるものが多い。日本では男性誌のみならず女性誌の編集長もほとんどが男性であり、日本の一般雑誌が性的な情報を扱うときに、興味本位な男性視点からの内容ばかりが取り上げられることで、男女の平等かつ良好な関係を基盤とする視点が欠けている原因になっていると考えられる。

## 2. メディアによる性情報への若者のニーズ

若者が必要とする性情報は、パートナーを理解し、愛情表現としての性行動の満足度を高めるとともに、リスクを回避できる知識や動機づけである。FGI の結果は、若者は年齢が上がるにつれ、氾濫するメディアを選択する目を持つことを示唆している。男性は性情報をアダルトビデオやインターネットから得る機会が女性より多いが、今回の調査でも男性が早い時期からビデオ等を情報源として利用していることが明らかになった。

## E. 結論

一般雑誌による効果的な STD 予防啓発を行うためには、興味を引きやすい内容であるだけでなく、医学的に正確な情報を提供するとともに、性行為には STD や望まない妊娠の可能性を伴うことを自覚させ、予防法や治療に関する情報を具体的に提示することが重要であると考えられる。FGI からは、若者の望む情報とはそれぞれ異性が性についてどのような思いがあるかを知ることや、STD 予防や避妊の具体的な方法であることがわかった。一般的にメディアを通じて性情報を得ている人は多く、特に若者への性情報発信においては、メディア情報を監視し、適切な情報提供を行うなど、専門家の責任は大きいといえる。

## F. 健康危険情報 なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

- (1) 野々山未希子, 石川陽子, 早乙女智子, 劔陽子, 野田洋子, 白井千香, 堀口雅子. 一般雑誌における STD 関連記事の傾向 (第 1 報) 日本性感染症学会誌 Vol.12 No.1 84-90 2001 年 7 月
- (2) 野々山未希子, 石川陽子, 早乙女智子, 劔陽子, 野田洋子, 白井千香, 堀口雅子. 一般雑誌における性関連記事の若者への影響と若者のニーズ (第 2 報) 性感染症学会誌投稿中

### 2. 学会発表

- (1) 野々山未希子, 石川陽子, 早乙女智子, 劔陽子, 野田洋子, 白井千香, 堀口雅子. 一般雑誌における STD 関連記事の傾向 (第 1 報) 日本性感染症学会 2000 年 12 月
- (2) 白井千香, 劔陽子, 堀口雅子. 対象性別による一般雑誌の STD 記事分析 日本公衆衛生学会 2001 年 10 月
- (3) 野々山未希子, 石川陽子, 早乙女智子, 劔陽子, 野田洋子, 白井千香, 堀口雅子. 一般雑誌における性関連記事の影響と若者のニーズ (第 2 報) 日本性感染症学会 2001 年 12 月

## H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

# 一般雑誌におけるSTD関連記事の傾向(第1報)

## Recent Tendency of STD Reports in Commercial Magazines in 1999

野々山未希子<sup>1),2)</sup> 石川陽子<sup>1)</sup> 早乙女智子<sup>1)</sup>  
Mikiko NONOYAMA Yoko ISHIKAWA Tomoko SAOTOME  
劔 陽子<sup>1)</sup> 野田洋子<sup>1)</sup> 白井千香<sup>1)</sup>  
Yoko TSURUGI Yoko NODA Chika SHIRAI  
堀口雅子<sup>1)</sup>  
Masako HORIGUCHI

近年、クラミジアをはじめSTDが増加・低年齢化の傾向にある。そこで成人男女の主な性知識・情報源である一般雑誌でのSTD関連記事の扱われ方を知り、STD予防の方法を検討することを目的に、大宅荘一文庫から検索した1999年発行の33社57誌179のSTD関連記事について医学的信憑性、予防効果、興味本位な取り扱い方、知識伝達の4項目を評価し、以下の結果を得た。STDを主目的とした21社29誌76記事中、医学的信憑性ありは44.7%、知識伝達性ありは18.4%(男性誌は1.3%)、興味本位な取り扱い方は23.7%であり男性誌が78.0%をしめた。また編集担当者対象のアンケート調査(有効回答22.3%)で予防教育を目的とした記事が12に対し、研究者が予防効果ありと認めたのは1記事であった。男性誌、女性誌での記事の取り上げ方の違いが明らかになったと同時に、医療関係者はメディアに対する正しい情報提供や啓発のための責任を自覚すべきであることが示唆された。

In recent years, STDs, especially Chlamydia infection, are increasing in Japan. As they are on the rise among teenagers, it is important to provide the correct information in sex education at school.

Commercial magazines are the main resources for adults who need correct information about sexuality and STDs. We investigated how STD information was dealt with in easily accessible commercial magazines. We obtained 179 STD-related articles in 57 magazines published by 33 companies in 1999 from the catalog of books collected by Souichi Oya. We evaluated these articles from the following 4 viewpoints: 1) medical correctness 2) STD prevention 3) amusement only, and 4) STD information. There were 76 articles in 29 magazines published by 21 companies containing STDs knowledge of them, 44% were medically correct, and 18.4% were STD informative. Only 1.3% of articles in men's magazines provided STD knowledge. On the contrary, amusement only articles accounted for of all articles, of which 78.0% were for men's magazines. At the same time, we sent questionnaires to the editors, and with these received responses from 22.3%. They intended to prevent STDs with these articles, but we found only one article that was satisfactory. We also found different attitudes towards STD prevention between men's and women's magazines. Medical advisors need to recognize the influence of commercial magazines as a source of information about STDs and must monitor whether correct information is provided by these media.

*Key words : STD (Sexually transmitted diseases), prevention, education-media*

1) 性と健康を考える女性専門家の会 : Professional Women's Coalition for Sexuality and Health

2) 国立国際医療センター : International Medical Center of Japan

平成13年3月1日受付、平成13年4月20日掲載決定

(〒104-0045)東京都中央区築地1-9-4 ちとせビル3F(朝日エル内) 性と健康を考える女性専門家の会 野々山未希子

## 緒言

我が国の学校教育における性教育は、文部省学習指導要領の中で定められているものの、全国的なレベルで体系的に行なわれているとはいえない。また、青少年のみならず成人男女に対しても正しい性知識・性情報を提供する場は殆どないため、入手しやすい一般雑誌だけを性に関する情報源としている人々も多いと考えられる。性行動の低年齢化や低年齢層における HIV 感染を含む STD (Sexually Transmitted Disease : 以下 STD) 罹患報告数の増加<sup>1)</sup>という今日状況において、メディアがどのように STD 情報を扱うかは人々の認識や行動に大きな影響を与えると考えられる。また、リプロダクティブ・ヘルス (性と生殖に関する健康) を阻害する一因としての性感染症の拡大を防ぐためには、メディアを含めた効果的な啓発活動が必要といえる。

本研究は、①性知識・性情報の主な入手源となりうる一般雑誌の中で、STD 関連記事がどのように扱われているのかを明らかにし、②効果的な STD 予防の啓発方法を検討することを目的とした。

## 対象と方法

### 1. STD 関連記事内容評価

- ① 2000年版大宅荘一文庫目録 (CD-ROM) から、「STD」「性感染症」「性病」「エイズ」「クラミジア」「淋病」「梅毒」「コンドーム」をキーワードにして記事を検索した。
- ② 記事タイトル及び要約をもとに6人の研究者が記事内容の評価し、研究者全員が「STDに直接関連無し」と判断した記事を除き、オリジナル記事を入手した。
- ③ 5人の研究者がこれらの記事の評価し、この中から「STDを主目的としている」記事を選択した。最終的に選択された記事について、「医学的信憑性」「予防効果」「興味本位な取り扱い方」「知識伝達性」の4項目について、1 (全くなし) から5 (非常にあり) までの5段階評価を行った。

### 2. アンケート調査

大宅荘一文庫目録から検索された全記事の編集担当

者を対象として、記事掲載目的及び記事内容に関して、自記式質問票による郵送アンケート調査を実施した。なお回答には、電話回答も含まれている。

### 3. 記事内容評価とアンケート回答の比較

- ① アンケートの回答の中から、STDと関連した記事についての回答のみを選出した。
- ② これらの記事について、研究者による記事内容評価及び、雑誌社からのアンケート回答内容を比較した。

## 結果

### 1. STD 関連記事の内容評価

#### ① 記事検索

1999年1月～12月発行の大宅荘一文庫収録雑誌について「STD」「性感染症」「性病」「エイズ」「クラミジア」「淋病」「梅毒」「コンドーム」というキーワードで検索されたのは、33社・57誌・179記事であり、57誌のうちわけは、男性誌16誌・女性誌13誌・男女共通誌28誌であった。

#### ② 対象記事の選択

大宅荘一文庫目録のタイトルと要約から、6人の研究者のうちいずれかが「STDに直接関連がある」と評価した記事は、29社・43誌・120記事であった。

#### ③ 記事内容評価

上記120の記事について5人の研究者が記事読みを行い、最終的に「STDを主目的としている記事」と評価した記事は21社・29誌・76記事であった。29誌のうちわけは、男性誌10誌・女性誌10誌・男女共通誌9誌であった。これらの記事について、「医学的信憑性」「予防効果」「興味本位な取り扱い方」「知識伝達性」の4項目を5段階評価で点数化した。5人の評価点の平均値が4.0を超えるものをそれぞれ「医学的信憑性あり」、「興味本位な取り扱い方」、「知識伝達性あり」、「予防効果あり」と判断した。評価基準の信頼性については ICC : Intraclass Correlation Coefficient がそれぞれ「医学的信憑性」0.94、「興味本位な取り扱い方」0.93、「知識伝達性」0.85「予防効果」0.89であった。Fig. 1 に各項目の平均点が4.0以上であった記事の割合を示す。「医学的信憑性あり」と判断した記事は、全体の44.7%であった。この中では女

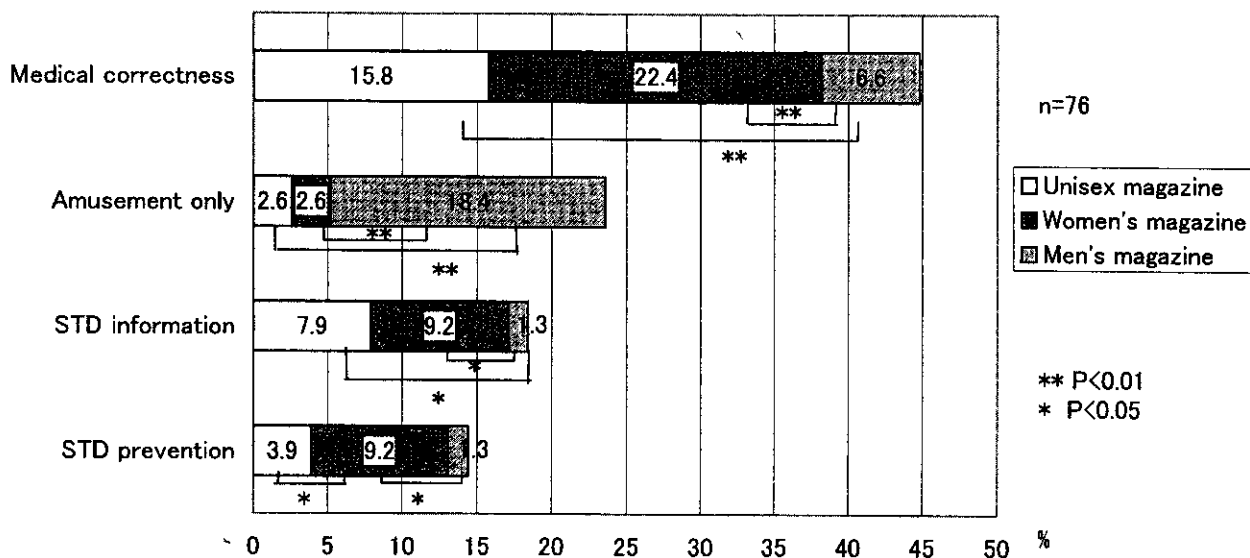


Fig. 1 Evaluation of STD related articles by types of magazine

性誌が22.4%と半数を占めているのに対し、男性誌が占める割合は6.6%と少数であった。男性誌の中には、医学的根拠のない「外見や仕草でわかる、危ない女の見分け方」の紹介など、明らかに誤った知識を提供している記事も多くみられた。

「興味本位な取り扱い方」と評価した記事は全体の23.7%であったが、その中でも男性誌が18.4%を占めており、「SEX体験談の紹介」だけに終始している記事も多くみられた。

「知識伝達性あり」と評価した記事は、全体の18.4%であった。中には保健所におけるHIV検査の手順を示した記者の体験記事等、HIV検査に関し精神的な障壁を取り除くのに有効と思われる記事もみられたが、全体の割合では低く、男性誌の占める割合は1.3%であった。

「予防効果あり」と評価した記事は、全体の14.5%であった。STDを主目的として扱う記事であるにも係わらず、STD予防に結びつく内容の記事は少なかった。その中でも女性誌が占める割合は9.2%であるのに対し、男性誌が占める割合は1.3%であった。特に、低用量ピル解禁を前に出された男性誌には、「ピルが解禁されれば風俗店でコンドームが必要なくなる」「ピルを服用している女性が相手なら、浮気がばれにくいので、遊びやすくなる」など、STDを予防するのではなく、蔓延を促進するような内容の記事が多くみられた。

4つの評価項目についてカイ2乗検定を行った結果、全ての項目について男性誌、女性誌の間に有意な差がみられた。

## 2. アンケート調査

キーワードにより検索された179記事の編集担当者を対象として、郵送アンケート調査を実施した。有効回答数は、男性誌6誌・女性誌6誌・男女共通誌14誌の計26誌、40記事で有効回答率は22.3%であった。

Table 1にアンケート結果を示す。購買対象年齢層は30代を中心に40代、20代が多かった。

これまでのSTD関連記事については、STD関連のキーワードを含むものの、雑誌社側が「なし」と回答しているものも含まれていた。

STD疾患内訳の延べ回数では、クラミジア感染症、HIV感染症が最も多く、以下淋菌感染症、性器ヘルペス、梅毒、尖圭コンジローマ、トリコモナス、カンジタであった。

STD体験談あるいは事例の紹介では、「コンジローマをほっぽらかしに（治療せず放置）している。かえってその方が名器と言われる。かゆいときに突いてもらうと、痛気持ちよくて快感。」「店に来た女の子に声をかければホイホイ、ヤラせてくれる。レジの裏とかキッチンでやったこともある。」など、STD予防よりも、STD蔓延を促

Table 1 Characteristics of magazines and contents of STD related articles n=40

Target age group (multiple answer)	-19	2
	20-29	17
	30-39	24
	40-49	19
	50-	16
	All ages	9
Selling price (Yen)	-300	7
	301-500	22
	501-800	11
Sales network (multiple answer)	Bookstore	35
	Kiosk	17
	Convenience Store	16
	Regular subscription	2
No. of circulation	-100,000	5
	100,001-500,000	19
	500,001-1,000,000	11
	No answer	5
No. of articles related STD	None	11
	1-3	9
	5-	8
	Several times/unsure	6
	No answer	6
No. of STDs appeared in Articles (multiple answer)	Chlamydia infection	11
	HIV infection	11
	Gonorrhea	8
	Genital herpes	7
	Syphilis	5
	Condyloma acuminatum	5
	Trichomoniasis	4
	Candidiasis	3
	Others	8
Case of STD related experience	Present	17
	Not present	11
	No answer	12
Statistical data	Present	15
	Not present	13
	No answer	12
Medical supervisor	Present	9
	Not present	13
	No answer	18
Intention to put STD related articles (multiple answer)	As information	21
	For interest	17
	To prevent STD	14
	Others	4

進するような内容の紹介がほとんどであった。無回答の記事は、記事内容が治療方法やウイルス学的解説など、体験談や事例が関係しないものであった。

記事中の統計情報の出典は、(旧)厚生省感染症発生動向調査や東京都予防医学協会、監修者の勤務先病院のデータ、自社アンケートなどであり、中には統計上の信頼性

が低いと考えられるものもみられた。

記事監修者については、実際の記事中では監修者の名前を挙げているものの、医療関係者ではなくフリーライターや体験者であるものが含まれていた。

編集者の記事掲載目的は、「興味深い内容だから」、「知識伝達のため」、「STDの予防教育目的」、さらに「そ

の他」として「ニュース情報として」「警告のため」「女の子の美容にも深く関わってくるため」「興味深いという側面もある。深謀術策のためか？」という記載があった。

### 3. 記事内容評価とアンケート回答の比較

アンケート回答のあった40記事の中で、研究者が「STDを主目的としている記事」と評価した記事は、31記事であった。Fig. 2に、これら31記事について、アンケート回答による編集担当者の記事掲載目的と、研究者による記事内容評価の比較を示す。

編集担当者が「知識伝達」を目的としていると回答した記事は19記事であったが、研究者が「医学的信憑性が高い」と評価した記事は10記事であった。

同様に編集担当者が「興味深い内容だから」と回答した記事が15あるのに対し、研究者が「知識伝達性が高い」と評価した記事は3記事であった。

特に差が大きかった項目としては、編集担当者が「予防教育」を目的とした記事が12あるのに対し、研究者が「予防効果あり」と判断した記事は、わずかに1記事であった。編集担当者が「予防教育目的」としている記事

の中には、若い女性のほとんどが複数のSTDに罹患しており、それを治療せずに放置しているなど、脅しを予防と解釈している認識がうかがわれた。また、これらの中には具体的な予防方法や治療方法について書かれているものはなく、反対に、皆がSTDに罹っているから珍しくない等の内容がほとんどであった。

### 考察

都内に在住する成人への調査<sup>2)</sup>では、「雑誌」は「新聞」「TVコマーシャル」「本」に次いで最も多く接するメディアのひとつであり、76%の人々が日常的に目にする、としている。また、同調査において性に関する知識の望ましい情報源として「学校教育」が第一に挙げられているのに対し、中絶に関する知識をどこから得たか、という質問に対しては、「雑誌」から得たと回答した者が39.3%で第一位であった。

また、全国国立大学生の性意識に関する調査<sup>3)</sup>では、男子学生のセックスに関する情報源の中で最も多いのが「雑誌・週刊誌」(67.7%)であり、次が「友人」

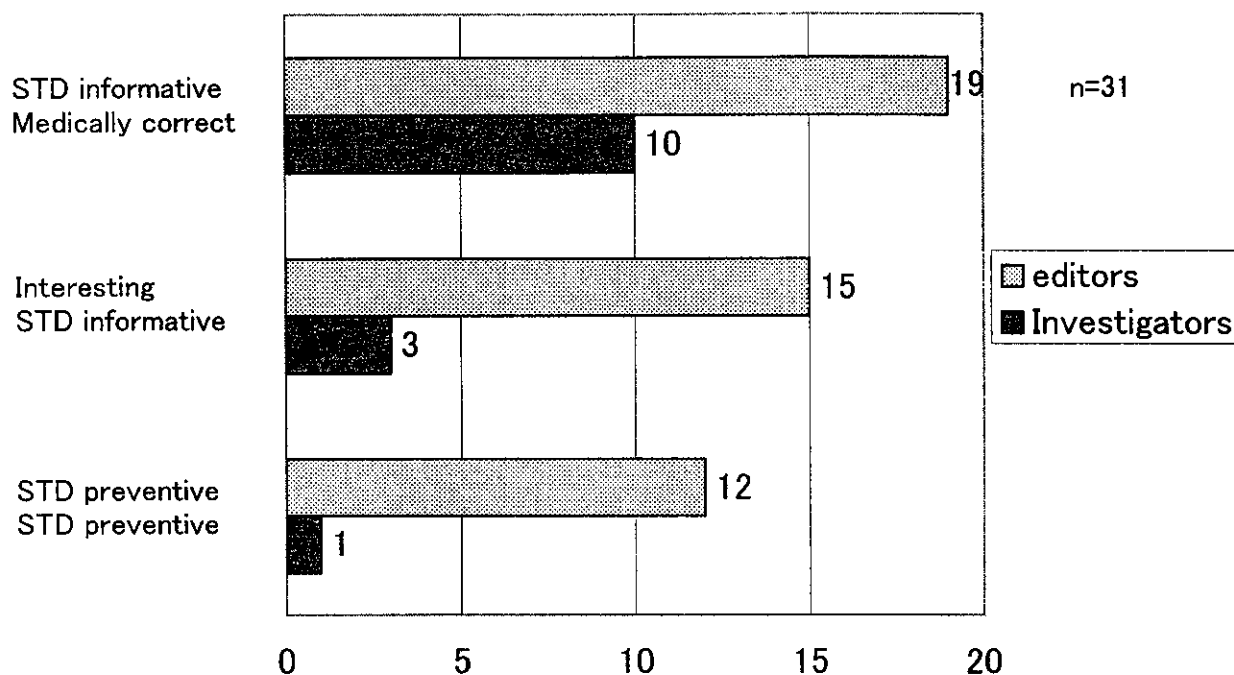


Fig. 2 Comparing viewpoint of STD related articles by editors and investigators

(65.4%) となっている。同様に女子学生では「友人」(56.1%) が最も多く、次が「雑誌・週刊誌」(54.7%) である。男女ともに第3以下には「ビデオ」「テレビ」「マンガ・コミック」が挙げられており、情報源として「メディア」と「友人」を選択している割合が多い。また、情報源となっている「友人情報」も「メディア」から得た情報であることが伺える。このことから一般雑誌・メディアは、若年期から成人の性情報の情報源として大きな役割を果たしているといえる。

若者が主にメディアから性情報を得ているのは日本に限ったことではなく、アメリカでも「テレビ」「映画」「コミック」「ビデオ」などのメディアによる性情報が、若者の性行動や性知識に影響を及ぼしている指摘されている<sup>4), 5), 6)</sup>。しかし、雑誌の中で扱われる性情報には、大きな違いがあり、アメリカの少女向け雑誌では性的な問題を精神面からとらえ、性的主体性の育成を目的としているなど、教育的配慮がなされている<sup>7)</sup>。それに比べて、我が国の一般雑誌のなかに教育的理念は見あたらず、身体的な興味本位の内容ばかりが取り上げられている。日本の少女雑誌の性情報に関する研究で佐藤<sup>8)</sup>は、男性の一方的な性的支配を基本にしたエロスの構造ばかりが取り上げられ、少女達に必要なリプロダクティブ・ヘルスに関する情報や性的主体性を確立するためのアドバイスが大きく不足している点を指摘している。

アメリカの少女向け雑誌の編集長は女性であることが一般的なのに対し、日本では男性誌のみならず女性誌の編集長もほとんどが男性であることも、日本の一般雑誌が性的な情報を扱うときに、興味本位な男性視点からの内容ばかりが取り上げられ、男女の平等かつ良好な関係を基盤とする視点が欠けている原因にもなっていると考えられる。

また今回の研究におけるひとつの発見は、男性誌と女性誌ではSTDの取り上げ方に明らかな違いがある、という点である。男性誌では性に関する記事はエロスという視点で取り上げられることが殆どであり、STDについての真面目な議論等は性欲を減退させるものとして敬遠される傾向がある。一方、女性誌ではセックス(性行為)を楽しむために正しい情報は不可欠という姿勢がみられるものが多い。近年の青少年の性交経験率<sup>9)</sup>からすると、このような情報は成人女性のみならず若年層を

含めたすべての男女に必要なものであるといえる。

男女共通誌ではSTD、とりわけエイズ(HIV感染症)を社会問題や科学的興味の対象として取り上げている姿勢がうかがえる。

また、記事が予防啓発に資する内容であるかの解釈は、編集者と研究者で評価が異なっていたことも明らかであった。北村ら<sup>10)</sup>が雑誌編集者に対して行ったインタビュー結果からは、避妊やSTDなど、女性の心身の健康に関わる知識は「売れる情報」として位置づけられていないことがわかる。男性視点から見た興味本位な性情報や、商品化された女性イメージを一般化するような内容ばかりが目され、購買につながっているのも現実である。しかし、発刊にあたっては、刹那的な内容の雑誌とはいえ、メディアの社会的な影響力を重要に捉え、医学的情報の信憑性や適切な知識伝達の監修には専門家の協力が不可欠といえる。専門家からも、研究結果の紹介にとどまらず、雑誌をSTD予防啓発の媒体として有効に活用する試みを行っていく必要がある。

## 結 語

一般雑誌による効果的なSTD予防啓発を行うためには、興味を引きやすい内容であるだけでなく、医学的に正確な情報を提供するとともに、性行為にはSTDや望まない妊娠の可能性を伴うことを自覚させ、予防法や治療に関する情報を具体的に提示することが重要であると考えられる。一般雑誌が若年者から成人までの性知識や性行動に多大な影響力を持っている以上、マスメディア関係者が社会的な役割を自覚すべきであると考えられる。同時に、医療関係者もまた、マスメディアへの情報提供や監視の役割を担うことができる立場にあるものとしての責任を自覚しなくてはならないであろう。

## 付 記

本研究は、日本性感染症学会第13回学術大会(名古屋市2000年12月2日)に発表したものに加筆修正したものである。最後に、本調査にご協力をいただいた編集者諸氏には深謝申し上げます。

文 献

- 1) 厚生省エイズ動向委員会および感染症発生動向調査：平成12年
- 2) 婦人青少年部による調査－男女平等に関する都民の意識調査－：東京都生活文化局編，平成6年
- 3) 「全国国立大学生 Sexual Health Study」調査報告書：厚生省HIV感染症の疫学研究班行動科学研究グループ，平成12年6月
- 4) Brown, J. D.: Adolescents' Sexual Media Diets. J. Adolesc Health, 27S: 35-40, 2000.
- 5) Gruber, E., Grube, J. W.: Adolescent sexuality and the media: a review of current knowledge and implications. West. J. Med., 172(3): 210-4, 2000.
- 6) Miriam, E., et al.: Sexuality, Contraception, and the media. Pediatrics, 107(1): 191, 2001.
- 7) 村松奏子, 佐藤りか ほか：少女雑誌の性情報と若年期のリプロダクティブ・ヘルス, 平成9年度厚生省心身障害者研究「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」
- 8) 佐藤りか：マスメディアと少女の性. 産婦の世界, 52(2): 91-98, 2000.
- 9) 青少年の性行動：日本性教育協会 編, 平成12年8月
- 10) 北村邦夫, 堂本暁子：メディアの性に関する報道が若年者にどのような影響を与えるか, 平成8年度厚生省心身障害者研究「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」



厚生科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）  
分担研究報告書

HIV 感染症予防のための啓発活動を目指して、雑誌の内容を分析する研究

研究協力者 石川 弘義 成城大学文芸学部教授

**研究要旨**

本邦の STD 関連推定罹患率の特徴は、1991 年から 1993 年の間で急激にその罹患率が減少していることにある。STD 罹患率が増えている現在、この時期に起こった減少の背景を明らかにすることで、今後の STD 予防活動に有益なフィードバックができると考えられる。本研究ではこの時期の雑誌メディアになんらかの違いがあると予測し、雑誌記事が読者に影響を及ぼしていると考え、STD 関連推定罹患率と雑誌メディアの関連性を推論した。分析対象となった 10 誌の中から STD に関連した記事を分析対象記事とし、1988 年、1991 年、1995 年、1999 年における STD に関連した記事内容の変化を分析した。分析の結果、男性誌では性的抑制の追求、女性誌では性感染症関連の知識伝達と性的抑制の追求に年次による差がみられた。この結果から、男性誌では性行為を抑制するような記事内容、女性誌では STD の知識を伝えるような記事内容と性行為を抑制するような記事内容が、STD 感染に影響することが示唆された。

**A. 研究目的**

近年、本邦の HIV や STD 感染者は増加傾向をたどる一方である。感染者数を見る限り、エイズキャンペーンをはじめとする STD キャンペーンや各種予防啓発活動はあまり功を奏していないように思われる。現状のままであれば、近い将来に感染爆発が起こるのは予期できる問題である。ではどのように対処していけばよいのか。

過去の STD 感染者数を眺めると、特に男性の淋病様疾患感染者数で 1991 年から 1993 年までの間でそれまで増加傾向にあったものが激減していることに気づく。同様に、女性の性器クラミジア感染者数も 1990 年から 1992 年

までの間の増加傾向が、1993 年で抑えられていることに気づく。1990 年から 1993 年くらいまでの間のこの感染者数のカーブは、世界的にも類を見ない現象であり、その時期に何らかの影響によって感染者数が減ったものと思われる。

そこで本研究では、その影響はメディアによるものが大きいのではないかという予測のもと、AIDS/ HIV 及び STD 感染症予防に関して、活字情報メディアを取り上げ、更にそのメディアの中から、若者を主な対象として発行されている広範な読者対象を有する男性誌と女性誌を取り上げ、その内容の年次推移の分析を試みる。雑誌メディアを取り上げた理由は、活字情

報メディアの中でも、雑誌メディアはよく若者に読まれているものであり、性に関する知識——必ずしも正確な情報ではないが——を雑誌から得ている者も多いと予想されるためである。分析から得られた結果を、既に報告されている STD 関連推定罹患率データと比較し、雑誌メディアとの間に関連性がみられるかどうかを推論する。

## B. 研究方法

1990 年から現在まで継続されている発行部数 10 万部以上の男性誌、女性誌を対象とする。雑誌の選定にはメディアリサーチセンター発行の『雑誌新聞総かたろぐ』の 2001 年版をもとに、それらの雑誌の中で STD 関連や AIDS/HIV や STD の記事が同種他誌と比較して、より多く掲載されている、あるいはより多くの読者層を持ち、影響力が大きいと思われる雑誌を抽出し、分析対象誌とした。対象誌は、男性誌は『週刊アサヒ芸能』、『週刊現代』、『週刊ポスト』、『ダカーポ』、『週刊プレイボーイ』、『HOT-DOG PRESS』の 6 誌で、女性誌は『女性自身』、『女性セブン』、『AN/AN』、『婦人公論』の 4 誌、計 10 誌を分析対象誌とした。

なお、成人向け雑誌や漫画雑誌は、内容の多くが快楽的な性を追求するのみで、AIDS/HIV や STD 関連の記事や予防方法などが、啓発的な視点から取り上げられることはほとんどないとプレビューで判断されたため、対象誌からは除外した。

分析対象期間は、淋菌感染症者が減少傾向に向かう直前の 1988 年、減少しだす 91 年、その後上がりだす 95 年および 99 年を対象とし、全数調査を国立国会図書館の所蔵を用いて行った。ただし、『週刊プレイボーイ』の 1999 年 4 月、7 月、9 月、10 月、11 月、12 月の発

行号と、『アサヒ芸能』の 1988 年 9 月の発行号は所蔵が確認できなかったため、サンプルには入っていない。なお、『週刊プレイボーイ』については、欠号が多かったため全ての分析から削除した。

雑誌記事の選択と抽出には 2 段階を経て行った。第 1 段階である雑誌からの記事選択を行った作業従事者は、大学生 7 名（社会学部在籍男 4 名・女 3 名）と主婦 5 名（製薬メーカー資料室勤務経験者を中心とした 40? 50 歳台）の 12 名で行った。作業従事者に対しては、あらかじめ以下の 5 点を遵守して選択作業を行うようオリエンテーションを行った。

1. HIV・AIDS 及び STD に関すると思われる、あるいはそういった記述がある記事を取り上げる
2. 明らかに快楽性を追求する商品化された性の記事は除く  
(例・フーズレポート、性体験談、小説など)
3. 性的指向性に関係なく取り上げる
4. 記事の主題が薬害エイズに関するものは割愛する
5. 明らかに正確ではない情報は除く
6. 明らかに HIV/AIDS 及び STD が主題ではない記事は除く

その結果、コピーされた記事は B4 スクラップ 14 冊分、600 余ページとなった。

第 2 段階として、これらの切り抜かれた全ての記事を、第 1 段階と同様のオリエンテーションを行った大学院生 4 名（社会心理学専攻修士課程男性 2 名、女性 2 名）により精読させ、当方が用意した評価紙に回答させた。全ての記事を全員で討議し、評価した。

今回、特にセクシュアリティや性感染症に関して専門的な知識があるわけではない4名が評定者であったが、これは雑誌を読むほとんど全ての人は専門知識のない人たちであり、その代表性から、あえて専門家を入れるのは避けたためである。

評価紙の構成と内容は以下の通りである。

(1) 雑誌の種類

該当する雑誌の種類について、当てはまるものを一つだけ回答してもらった。

(2) 記事の発行年

抽出された記事が何年に発行されたのかを書いてもらった。

(3) 該当した記事のページ数

記事のページ数を記入してもらった。記事が1ページに満たない場合は、該当する記事の面積を測り、その記事が載っているページの全体の面積を分母にして割ることで算出した。なお、今回は元来ある雑誌別による面積の違いについては、個別にみていくわけではないので、特に重み付けをしなかった。

(4) 記事が取り上げている病気（感染）の種類

種類は、AIDS/HIV、HIV以外の性感染症、薬害エイズ、その他で回答してもらい、複数ある場合は複数回答とした。

(5) 感染経路の記述

挿入行為、オーラルセックス、静脈注射、輸血、母子感染、針刺し事故、その他、記述なしのいずれかで回答してもらい、複数ある場合は複数回答とした。経路が単に「セックス」と記述してある場合には挿入行為とオーラルセックスの2つに該当するものとして処理した。

(6) 記事の評価尺度

14項目について、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で行った。項目の作成にあたっては、当方で実際に記事を読んでプリテストを行なった結果、最終的に14項目となった。

## C. 研究結果

### 第1節 該当記事数

#### 1. 記事数（別紙資料『(1) 雑誌の種類と発行年』参照）

有効記事数は全部で104件であり、内訳は週刊ポスト19件、週刊現代17件、週刊アサヒ芸能8件、ダカーポ16件、HotDog Press9件、ANAN5件、女性セブン18件、女性自身4件、婦人公論8件であった。年次でみていくと、88年には30件、91年には28件、95年には18件、99年には28件あった。

#### 2. 病気の種類と発行年の記事数（別紙資料『(2) 病気の種類と発行年』参照）

複数回答で行い、131件あった。内訳は、AIDS/HIVについて書いてある記事が82件あり、HIV以外の性感染症について書いてある記事が41件あり、その他のことについて書いてある記事が8件あった。年次でみていくと、88年には36件、91年には36件、95年には21件、99年には38件あった。

#### 3. 感染経路と発行年の記事数（別紙資料『(3) 感染経路と発行年』参照）

複数回答で行い、170件あった。内訳は、挿入行為63件、オーラルセックス40件、静脈注射7件、輸血16件、母子感染5件、針刺し

事故3件、その他9件、記述なし27件であった。年次でみていくと、88年には56件、91年には42件、95年には30件、99年には42件あった。

#### 4. AIDS/ HIVの記事数と発行年(別紙資料『(4) AIDS/ HIVの記事数と発行年のクロス表』参照)

AIDS/ HIVの記事数のある・なしと発行年ごとの関連を「記述あり・なし」とそれぞれの発行年での2×4の $\chi^2$ 検定を行った。その結果有意な関連傾向がみられた( $\chi^2(3)=6.548, p<.10$ )。どの年に有意があるのかをみるために残差分析を行った結果、95年の記述ありと記述なしの間で有意傾向、99年の記述ありと記述なしの間で5%水準で有意差がみられた。このことは、95年でAIDS/ HIVの記事数が多い傾向があり、99年では有意にAIDS/ HIVの記事数が少ないことを示している。

#### 5. HIV以外の性感染症の記事数と発行年(別紙資料『(5) HIV以外の性感染症の記事数と発行年のクロス表』参照)

HIV以外の性感染症の記事数のある・なしと発行年ごとの関連を、「記述あり・なし」とそれぞれの発行年での2×4の $\chi^2$ 検定を行った。その結果、有意な関連がみられた( $\chi^2(3)=10.754, p<.05$ )。どの年に有意があるのかをみるために残差分析を行った結果、99年の記述ありと記述なしの間で5%水準で有意差がみられた。このことは、99年でHIV以外の性感染症の記事数が多いことを示している。

### 第2節 雑誌記事内容の分析

#### 1. 評価尺度の因子分析(別紙資料『(6) 評価尺度の因子分析結果(男性誌・女性誌)』

参照)

評価尺度のすべての項目を用い男性誌女性誌共に、共通性の初期値を1とした主成分分析法・Varimax回転で因子分析を行った。その結果、寄与率と因子の解釈のしやすさから4因子構造をなしていると判断した。

第1因子を『性的興味の追求』、第2因子を『性感染症関連の知識伝達』、第3因子を『性的抑制の追求』、第4因子を『相手への責任転化』と命名した。尺度構成にあたっては因子負荷量が.40以上の項目を選んだ。したがって、第1因子は4項目、第2因子は4項目、第3因子は4項目、第4因子は2項目からなる。

ここで解釈された各因子の標準因子得点を算出し、さらに分析をすすめることにした。

#### 2. 下位尺度ごとの発行年と雑誌別の分散分析

##### 性的興味の追求の分散分析

雑誌別と発行年の2×4の分散分析を行った。その結果、有意差はみられなかった。

##### 性感染症関連の知識伝達の分散分析(別紙資料『(7)性感染症関連の知識伝達における発行年と雑誌別推移図』参照)

雑誌別と発行年の2×4の分散分析を行った。その結果、雑誌別と発行年の交互作用がみられた( $F(3, 93)=2.402, p<.10$ )。

この結果は、女性誌での変動が激しい。女性誌の99年で伝達をしているが、それ以外ではあまり伝達性がなく、特に95年が最も低い。一方男性誌では、91年で若干伝達しているものの、その後は緩やかに低下している。

##### 性的抑制の追求の分散分析(別紙資料『(8)性的抑制の追求における発行年と雑誌別推移図』

参照)

雑誌別と発行年の2×4の分散分析を行った。その結果、雑誌別の主効果 ( $F(1, 93) = 2.989, p < .10$ )、および雑誌別と発行年の交互作用がみられた ( $F(3, 93) = 3.201, p < .05$ )。この結果は、男性誌では91年から95年で標準因子得点がプラスに転じるほど上昇している。逆に女性誌では95年でマイナスになり、99年で再び上昇傾向にある。

相手への責任転嫁の分散分析 (別紙資料『(9) 相手への責任転嫁における発行年と雑誌別推移図』参照)

雑誌別と発行年の2×4の分散分析を行った。その結果、発行年の主効果がみられた ( $F(3, 93) = 2.461, p < .10$ )。その後、多重比較でLSD法を行った結果、91年と95年、および91年と99年で差がみられた ( $MSe = .961, p < .05$ )。これは、91年よりも95年および99年でより相手に責任転化をしている傾向がある。

### 3. ページ数の推移 (別紙資料『(10) ページ数の推移図』参照)

記事のページ数がどのように変わっているのかをみるために、雑誌別と発行年の2×4の分散分析を行った。その結果、発行年の主効果 ( $F(3, 96) = 2.4240, p < .10$ )、雑誌別の主効果 ( $F(1, 96) = 3.796, p < .10$ )、交互作用がみられた ( $F(3, 96) = 2.230, p < .10$ )。この結果は、男性誌は88年からページ数がほとんど変わらないが、女性誌において年々ページ数が減っていることを示している。

## 第3節 雑誌記事内容の分析 (男性誌のみ)

### 1. 評価尺度の因子分析 (別紙資料『(11) 男性誌における評価尺度の因子分析結果』参

照)

評価尺度のすべての項目を用い、共通性の初期値を1とした主成分分析法・Varimax回転で因子分析を行った。その結果、寄与率と因子の解釈のしやすさから4因子構造をなしていると判断した。

第1因子を『性感染症関連の知識伝達』、第2因子を『性的興味の追求』、第3因子を『性的抑制の追求』、第4因子を『性の体験談』と命名した。尺度構成にあたっては因子負荷量が.40以上の項目を選んだ。したがって、第1因子は5項目、第2因子は4項目、第3因子は3項目、第4因子は2項目からなる。

ここで解釈された各因子の標準因子得点を算出し、さらに分析をすすめることにした。

### 2. 下位尺度ごとの発行年と雑誌別の分散分析 (別紙資料『(12) 男性誌における評価尺度の推移図』参照)

下位尺度と発行年の4×4の分散分析を行った。分析の結果、「性的抑制の追求」で主効果 ( $F(3, 62) = 3.333, p < .05$ )、「性の体験談」で主効果がみられた ( $F(3, 62) = 2.902, p < .05$ )。LSD法で多重比較した結果、「性的抑制の追求」で88年と95年、88年と99年で差がみられ ( $MSe = .903, p < .05$ )、「性の体験談」では91年と95年、91年と99年で差がみられた ( $MSe = .919, p < .05$ )。

この結果は、性的抑制の追求は95年および99年でより追求されており、また性の体験談的な記事も同様の傾向にあることを示している。

## 第4節 雑誌記事内容の分析 (女性誌のみ)

### 1. 評価尺度の因子分析 (別紙資料『(13) 女性誌における評価尺度の因子分析結果』参

照)

評価尺度のすべての項目を用い、共通性の初期値を 1 とした主成分分析法・Varimax 回転で因子分析を行った。その結果、寄与率と因子の解釈のしやすさから 4 因子構造をなしていると判断した。

第 1 因子を『性的抑制の追求』、第 2 因子を『予防行動促進』、第 3 因子を『性の商品化』、第 4 因子を『性感染症の近接性』と命名した。尺度構成にあたっては因子負荷量が.40 以上の項目を選んだ。したがって、第 1 因子は 4 項目、第 2 因子は 4 項目、第 3 因子は 2 項目、第 4 因子は 4 項目からなる。

ここで解釈された各因子の標準因子得点を算出し、さらに分析をすすめることにした。

## 2. 下位尺度ごとの発行年と雑誌別の分散分析 (別紙資料『(14) 女性誌における評価尺度の推移図』参照)

下位尺度と発行年の 4×4 の分散分析を行った。分析の結果、「予防行動促進」で主効果 ( $F(3, 31) = 4.402, p < .05$ )、「性感染症の近接性」で主効果がみられた ( $F(3, 31) = 3.451, p < .05$ )。LSD 法で多重比較した結果、「予防行動促進」で 88 年と 95 年、91 年と 95 年、95 年と 99 年で差がみられ ( $MSe = .769, p < .05$ )、「性感染症の近接性」では 88 年と 99 年、91 年と 99 年で差がみられた ( $MSe = .822, p < .05$ )。

この結果は、予防行動を促進するような記事は 95 年ではほとんどなかったが、99 年では回復しており、また性感染症が身近に迫っているという記事内容はあまりみられなかったが、99 年でようやく性感染症が身近に迫ってきているという記事内容がみられるようになったことを示している。

## D. 考察

### 第 1 節 記事数の考察

本研究では、数ある記事の中から AIDS/HIV や STD に関する記事を抽出したわけであるが、全体的にその記事数は少なかった。特に男性誌では快楽的な性を追求するような記事が溢れており、STD に関する記事があったとしてもそのページ数は少なめである。女性誌でも STD 関連の記事のページ数は年々減っている傾向にある。AIDS/や HIV に関する記事では 95 年では比較的多かったが 99 年では少なくなっており、HIV に対する関心の低下が示された。これに呼応するかのように HIV 感染者は年々増加傾向にあり、雑誌メディアで HIV に関する記事の掲載が望まれる。HIV 記事の低下に反比例するかのように HIV 以外の STD の記事は増えている。これは、雑誌メディアが HIV から STD へと興味・関心が移ってきていることの現れなのかもしれないが、HIV とて STD であり、「STD としての HIV」という側面をより主張する必要がある。

### 第 2 節 男性誌・女性誌全体の考察

男性誌・女性誌共に STD に関連した記事内容は、「性的興味追求」、「性感染症関連の知識伝達」、「性的抑制の追求」、「相手への責任転化」に分けられ、その因子的妥当性は 67.363% という累積寄与率からも明らかである。したがって本研究で用いた尺度は、STD 関連の記事を評定する尺度としても使用可能であると思われる。記事の抽出において、明らかに快楽性を追求する商品化された記事は除いたが、因子分析の結果で第 1 因子に性的興味追求がきて、第 2 因子に性感染症関連の知識伝達がきている。このことは、STD を真正面から取り扱っている記事でも、STD のことよりも性的興

味をそそるような側面が強調されていることがいえる。これでは STD のことについて書いてあっても、読者に与える影響は少ないのではないかと推測される。

雑誌別と発行年の分散分析の結果、性感染症関連の知識伝達は男性誌ではほとんど変化がなく、あまり伝えていない。したがって、知識を伝達するような記事が書かれることが望まれる。女性誌では 95 年でその伝達の傾向はなかったものの、99 年では伝えている。これは 93 年で STD 感染が減った安心感が 95 年まで続いたため低下したが、その後 STD 感染が再び上昇傾向に転じたため再び記事で STD 予防を促す内容を書き始めたのかもしれない。したがって、女性の STD 感染の増減には STD の知識を伝えるような記事内容が影響することが考えられる。

性的抑制の追求では、男性誌では 95 年にかけて上昇傾向にあり、特に 95 年でそのピークに達している。男性の淋菌感染者が減ったのは 91 年から 93 年の間であり、まさに男性誌における性的抑制の追求の増加と一致している結果にあると思われる。95 年で性的抑制の追求が最大であるにもかかわらず淋菌感染者が若干増えたのは、上述のしたように男性誌では記事のページ数が少なく、また STD 関連の記事の前後には快楽的な性を追求している記事があり、性的抑制の効果も低減することが考えられる。また、性的抑制が何年も増加傾向にあれば、読者がその内容に慣れてしまい、記事内容の影響が弱まることも考えられる。女性誌では 91 年から 95 年にかけて性的抑制を追求するような記事内容はなくなり、99 年で再び抑制する傾向にある。これは上記の STD 関連の知識伝達と同じ傾向であるため、女性誌では両者は一つのセットになって書かれているのかもしれない。

れない。

相手への責任転嫁では、男性誌女性誌共に年々「感染したのは自分のせいではなく、相手のせいである」とする傾向があることが示唆された。相手に感染の責任があるとする記事内容では、いつまで経っても予防することはなく、感染は減らない。STD 感染の予防のためにも、感染は自分の責任であり、予防は自ら行わなければならないことを記事で書く必要がある。責任を相手へ転嫁している結果が、STD 感染者を年々増加傾向に導いていることも考えられるため、今後は「感染の責任は自分にある」「予防は自ら行い、それを自己決定する必要がある」ことを記事で書いていく必要があると思われる。

### 第 3 節 男性誌の考察

男性誌のみを取り上げ因子分析した結果、第 2 因子に性的興味の追求がきている。これは女性誌のみの場合にはない。したがって、STD の記事における性的興味の追求は男性誌にその傾向があると考えられる。また、STD の記事も体験談風に書かれているのが男性誌の特徴といえる。第 1 因子に性感染症関連の知識伝達がきているが、その後の分析では年次による差がみられないため、STD 感染には影響していないのかもしれない。しかし、上述のように標準因子得点からも 88 年の頃からあまり知識を伝えていないと考えられるため、今後は読者にわかりやすく、また伝えようという意識を持って記事にする必要があるのではないかと。

性的抑制の追求では、男性誌と女性誌を合わせた時の結果と全く同じであり、上記の考察と全く同じことがいえる。性の体験談では、男性誌と女性誌を合わせた時の第 4 因子の項目順が入れ替わっただけである。これは、男性誌と

女性誌を合わせたときは責任を転化するような内容といえたが、男性誌のみの場合では責任を転化する場合よりも体験談風の印象が強く、「セックスを体験したら、相手にSTDをうつされた。自分は悪いことはしていないのに。」という傾向の記事内容になっていることが考えられる。このことから、UNAIDSの2000年のキャンペーンテーマであった「AIDS: Men Make a Difference」が、STD予防という意味も含めて本邦の男性に必要ではないだろうか。

#### 第4節 女性誌の考察

女性誌のみを取り上げ因子分析した結果、これまでの結果とは違った因子構造になっていた。女性誌で最も印象が強いのは性的抑制の追求であり、次に予防行動の促進、性の商品化、性感染症の近接性がきている。男性誌と違い女性誌では性を商品化したような記事内容がみられ、これは「みられるもの」としての女性、あるいは「決定権は男性にある」とする、まさに社会的性役割を表しているといえる。その後の分析では特に影響がみられないが、しかし、感染の予防には女性自身の自己決定も重要であり、「予防しない相手に対してははっきりと断りましょう」とした記事も必要ではないだろうか。

予防行動促進では、男性誌と女性誌を合わせた時の性感染症関連の知識伝達と同じ傾向にあり、STD感染者が減った安心感が95年まで続いていたことが予想される。99年では再び予防行動を促進している傾向にある。性感染症の近接性では、年々その傾向が強まってきており、STDはもはや身近な感染症であることが述べられている。しかしながら、女性のSTD感染者数を見る限り、性感染症の近接性は影響

していないと考えられる。感染は身近に迫ってきていることは伝えているが、予防意識を促すような記事傾向は低いのもかもしれない。予防意識を促す意味でも、男性と同様に女性もSTD感染に対する意識の変化が必要なのではないだろうか。

以上は週刊誌の記事についての、それがどのような内容を伝達する可能性をもっているか、ということについての推測を交えた分析であるが、ここで行った調査は、従来のマスコミ論でいう「利用-満足研究」のヴァリエーションの一つという側面をもっている。前述した尺度評価は、それぞれの記事の利用と満足のされ方を推測する手がかりの一つとも考えられるからである。ただし、この点については、ここで用いられたような間接的な手法だけではなく、たとえ少数サンプルではあっても読者を対象とした「読み」についての実証的な調査を実施することが望ましい。これは今後のテーマの一つであろう。

なお、本研究には、日本性科学情報センターの島崎継雄、成城大学大学院生の荻野員也両氏の協力をいただいた。そうして特にデータの解析には荻野氏の努力に負うところが大きかったことを特記しておきたい。

#### E. 健康危険情報 なし

#### F. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

#### G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし



## 資料

### (1) 雑誌の種類と発行年

雑誌名	1988年	1991年	1995年	1999年	合計
週刊ポスト	4 (3.8%)	6 (5.8%)	1 (1.0%)	8 (7.7%)	19 (18.3%)
週刊現代	7 (6.7%)	5 (4.8%)	5 (4.8%)	0	17 (16.3%)
週刊アサヒ芸能	3 (2.9%)	3 (2.79%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	8 (7.7%)
ダカーポ	6 (5.8%)	3 (2.9%)	5 (4.8%)	2 (1.9%)	16 (15.4%)
HotDog Press	1 (1.0%)	3 (2.9%)	3 (2.9%)	2 (1.9%)	9 (8.7%)
AN AN	1 (1.0%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	2 (1.9%)	5 (4.8%)
女性セブン	2 (1.9%)	5 (4.8%)	1 (1.0%)	10 (9.61%)	18 (17.3%)
女性自身	2 (1.9%)	1 (1.0%)	0	1 (1.0%)	4 (3.8%)
婦人公論	4 (3.8%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	2 (1.9%)	8 (7.7%)
合計	30 (28.8%)	28 (26.9%)	18 (17.3%)	28 (26.9%)	104 (100.0%)

### (2) 病気の種類と発行年 (複数回答)

病気の種類	1988年	1991年	1995年	1999年	合計
AIDS/ HIV	25	22	17	18	82
HIV以外の性感染症	9	10	4	18	41
その他	2	4	0	2	8
合計	36	36	21	38	131

#### HIV以外の性感染症

クラミジア (24)、淋病 (20)、尖形コンジローム (17)、ヘルペス (16)、梅毒 (14)、カンジダ (膣炎) (6)、毛ジラミ (6)、STD (5)、トリコモナス膣炎 (5)、軟性下疳 (4)、鼠径リンパ肉芽腫 (3)、B型肝炎 (3)、慢性前腺炎、アメーバ赤痢、HPV、ローソク病、癌

#### その他

ビル (3)、コンドーム (2)、ヘロイン中毒、ドラッグ、細菌

### (3) 感染経路と発行年（複数回答）

感染経路	1988年	1991年	1995年	1999年	合計
挿入行為	18	17	9	19	63
オーラルセックス	15	9	8	8	40
静脈注射	3	2	0	2	7
輸血	7	2	4	3	16
母子感染	1	2	0	2	5
針刺し事故	2	1	0	0	3
その他	2	3	2	2	9
記述なし	8	6	7	6	27
合計	56	42	30	42	170

その他

キス (5)、傷口からの感染、細菌からの感染、HIV (+) の歯科医の治療による感染、タトゥー、性器の共用  
カミソリの共用、公共施設のロッカー、プール、サウナ、寝具、風呂、タオル、便器、見るだけではエイズに感染しない

### (4) AIDS/ HIV の記事数と発行年のクロス表

	1988年	1991年	1995年	1999年	合計
記述なし	5	6	1	10	22
記述あり	25	22	17	18	82
合計	30	28	18	28	104

### (5) HIV 以外の性感染症の記事数と発行年のクロス表

	1988年	1991年	1995年	1999年	合計
記述なし	21	18	14	10	63
記述あり	9	10	4	18	41
合計	30	28	18	28	104

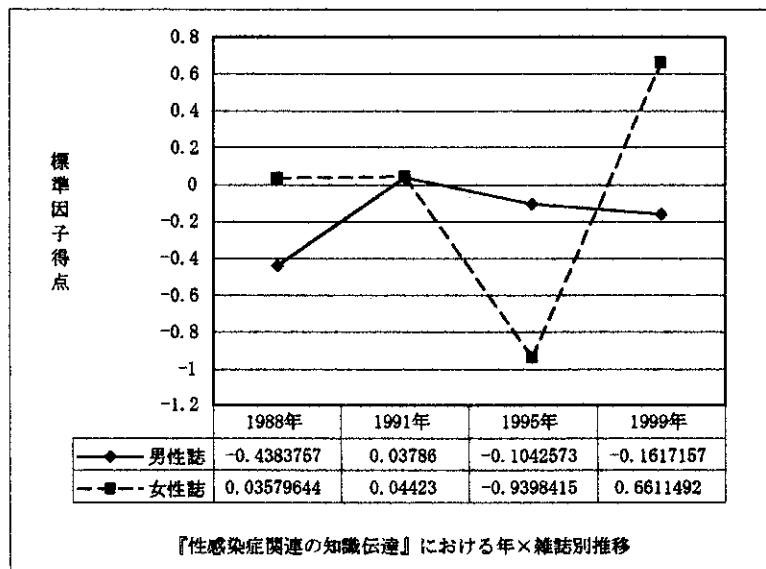
(6) 評価尺度の因子分析結果 (男性誌・女性誌)

評価尺度の因子分析結果

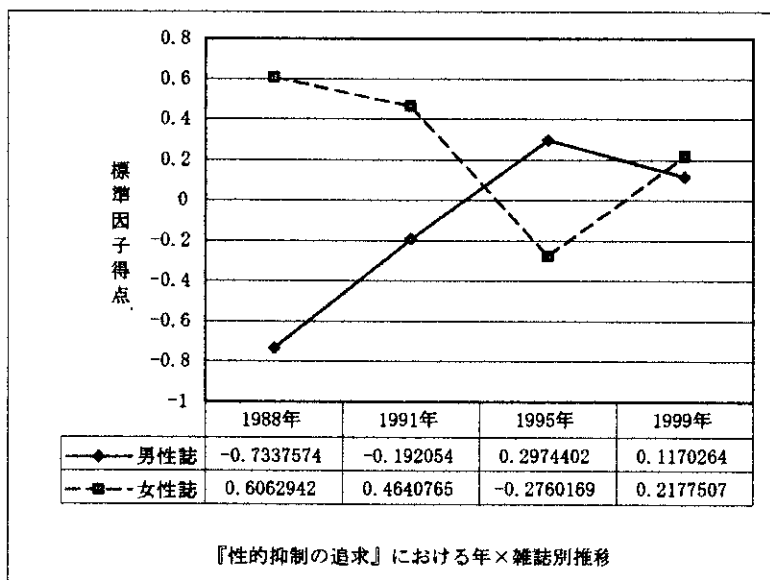
	1	2	3	4	$h^2$
<b>第1因子 性的興味追求</b>					
9. 性の快楽性を追求している記事である。	.885	-.124	-.004	.050	.801
4. 性行動を促すような書き方をしている記事である。	.849	-.206	-.008	-.063	.767
13. 性を「商品」として扱っている記事である。	.815	-.173	-.143	.074	.720
6. 問題を興味本位で扱っている記事である。	.550	-.479	.090	-.080	.547
<b>第2因子 性感染症関連の知識伝達</b>					
5. 知識を正確に伝えようとしている記事である。	-.197	.788	.143	.073	.686
1. 予防行動を促進している記事である。	-.010	.740	.429	-.247	.793
10. 「問題」が自分の身に迫ってきていることを感じさせる記事である。	-.265	.717	.100	.226	.646
3. 深刻なテーマとして扱っている記事である。	-.428	.709	.143	.182	.738
<b>第3因子 性的抑制の追求</b>					
12. 性行動を抑制させようとしている記事である。	-.208	.182	.786	.077	.701
2. 性行動をすることに恐怖感を与える記事である。	-.155	.113	.750	.142	.620
8. コンドームの必要性を唱えている記事である。	.037	.425	.596	-.304	.630
7. 「病気は稀なものである」として扱っている記事である。	.244	.016	.449	.052	.264
<b>第4因子 相手への責任転化</b>					
14. 「感染したのは自分のせいではなく、相手のせいである」としている記事である。	.103	.337	-.143	.790	.769
11. 読者 (あるいは記者) の体験談的に構成されている記事である。	.009	-.122	.355	.781	.751

固有値	2.900	2.858	2.149	1.524
寄与率	20.711	20.417	15.350	10.884
累積寄与率 (%)	20.711	41.129	56.479	67.363

(7) 『性感染症関連の知識伝達』における発行年と雑誌別推移図



(8) 『性的抑制の追求』における発行年と雑誌別推移図



(9) 『相手への責任転化』における発行年と雑誌別推移図

